

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 8 号 (1 0 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 <平年比(前年比)>
イネ	トビイロウンカ	並
黒大豆・アズキ	ハスモンヨトウ ハダニ類 黒大豆 吸実性カメムシ類	黒大豆 やや多 アズキ やや少 やや少 並
チャ	チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ	発生量:山城 並 (並) 丹波 やや多 (並) 丹後 並 (並) 発生量:山城 少 (少) 丹波 並 (並) 丹後 やや多 (やや多) 発生量:山城 やや少 (少) 丹波 やや少 (やや少) 丹後 並 (少)
野菜	アブラナ科野菜 ベと病 アブラナ科野菜 白斑病 キャベツ 菌核病 アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病 アブラナ科野菜 コナガ 野菜類全般 ハスモンヨトウ ホウレンソウ シロオビノメイガ ネギ ネギハモグリバエ 野菜類全般 ハモグリバエ類 ネギ ネギアザミウマ 野菜類全般 タバコガ類 アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ	並 (並) 並 (並) 並 (並) やや多 (やや多) 並 (並) 並 (並) 並 (やや少) 少 (並) やや少 (やや少) 多 (並) やや少 やや少 (並)

※平年とは過去 1 0 年の平均である。

■■■■■■■■■■ 目次 ■■■■■■■■■■

予報の概要	1	II 用語の定義	1 2
予報本文	2	III 予報本文の見方	1 3
今後注意すべきその他の病虫害等	1 0	IV 短期暴露評価の実施に伴う	
参考 I 近畿地方 1 か月予報	1 2	農薬の変更登録について	2 3

予報本文

イ ネ

1 晩生水稲 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、巡回及び予察灯調査ともに発生を認めていない（平年並）。

(2) 向こう1か月の気温は平年比低い（－）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。

(2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。

(3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

* 京都府奨励品種の内の晩生品種：ヒノヒカリ

黒大豆・アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：黒大豆 平年比やや多い
アズキ 平年比やや少ない

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆で平年比やや多く（＋）、アズキで平年比やや少ない（－）。

項目	作物	本年	平年値
寄生株率(%)	黒大豆	2.0	4.7
	アズキ	0.0	4.8
白変葉箇所数(10a)	黒大豆	4.4	3.4
	アズキ	0.7	1.1

(2) 9月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	230.5	357.9
亀岡市	320.4	523.9
京丹後市	230.4	267.2

* 誘殺数(頭)：8月第4半旬～9月第3半旬の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比低く（－）、降水量は日本海側で平年並または少なく（＋）、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

2 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は黒大豆、アズキとも平年比やや少ない(－)。

項目	作物	本年	平年値
寄生株率(%)	黒大豆	8.5	17.9
	アズキ	0.4	3.6

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(+)、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。

3 黒大豆 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は平年並。

項目	本年	平年値
寄生株率	2.0	2.0

(2) 9月第3半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。

種類	場所	本年	平年値
アオクサカメムシ	京田辺市	1	0.0
	亀岡市	0	0.8
	京丹後市	0	0.7
イチモンジカメムシ	京田辺市	0	0.3
	亀岡市	0	2.2
	京丹後市	0	0.4

*誘殺数(頭)：8月第4半旬～9月第3半旬の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 莢が黄変する時期まで吸汁を続け、ほ場周辺に雑草地など発生しやすい場所があると、被害を受けやすい。

※今後注意すべきその他の病害虫は p 10を参照

チャ

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年比やや多い(前年並)
丹後 例年並(前年並)

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、発生量は山城、丹後で平年並、丹波では例年比やや多い(+)

地域	項目	本年	平年値
山城	綴葉数(㎡当たり)	2.2	2.2
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	27.3	22.0
丹波	綴葉数(㎡当たり)	4.8	2.0
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.1
	発生ほ場率(%)	33.3	23.3
丹後	綴葉数(㎡当たり)	0.0	0.8
	幼虫数(㎡当たり)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	3.1

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
(2) ふ化した幼虫は葉を綴って食害するようになるため、薬剤がかかりにくいので注意する。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波で平年並、丹後で例年比やや多い（＋）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生芽率(%)	2.5	17.7
	巻葉数(㎡当たり)	0.4	5.9
	発生ほ場率(%)	50.0	63.6
丹波	寄生芽率(%)	0.0	3.4
	巻葉数(㎡当たり)	0.7	0.7
	発生ほ場率(%)	33.3	50.7
丹後	寄生芽率(%)	1.5	0.6
	巻葉数(㎡当たり)	0.3	0.4
	発生ほ場率(%)	75.0	28.1

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し、越冬密度を下げるようにする。
(2) 被害葉はチャノキイロアザミウマやカンザワハダニの発生源になるので注意する。

3 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
丹後 例年並（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現発生量は山城、丹波で平年比やや少なく（－）、丹後では例年並。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	1.2	6.3
	寄生虫数(100葉当たり)	2.1	24.5
	発生ほ場率(%)	13.6	43.7
丹波	寄生葉率(%)	0.0	3.6
	寄生虫数(100葉当たり)	0.0	11.1
	発生ほ場率(%)	0.0	43.3
丹後	寄生葉率(%)	0.5	8.8
	寄生虫数(100葉当たり)	0.5	88.3
	発生ほ場率(%)	25.0	37.5

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
(2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。11月中旬に防除する。

※今後注意すべきその他の病害虫は p 10 を参照

野菜

1 アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、キャベツ、カブで発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	0.0	6.5

- (2) 向こう1か月の気温は平年比低く(＋)、降水量は日本海側で平年並または少なく(－)、太平洋側では平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多い。
(2) 気温が低く曇雨天が続くと発生しやすい。

2 アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、カブで発生を認めていない（例年並）。

作物	項目	本年	例年値
カブ	発病株率(%)	0.0	1.0

- (2) 向こう1か月の気温は平年比低く(＋)、降水量は日本海側で平年並または少なく(－)、太平洋側では平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 肥切れは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
(2) 秋から初冬にかけて雨の多い年に発生が多い。

3 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 山城地域で、春期に発生を認めた。
- (2) 向こう1か月の気温は平年比低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく（-）、太平洋側では平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壤中で2～3年間生き残る。
- (2) 適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。

4 アブラナ科野菜 黒腐病・黒斑細菌病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、黒腐病の発生はキャベツで平年比多く（+）、黒斑細菌病はダイコンで発生を認めていない（平年並）。

作物	病害	項目	本年	平年値
キャベツ	黒腐病	発病株率(%)	4.8	0.1
ダイコン	黒斑細菌病	発病株率(%)	0.0	0.0

- (2) 生育初期の8月下旬から9月中旬に掛けて降雨が続く、感染の可能性が高まっている（+）。
- (3) 向こう1か月の気温は平年比低く（+）、降水量は日本海側で平年並または少なく（-）、太平洋側では平年並、日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発病を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。

5 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、キャベツでの発生は平年比やや多く（+）、ダイコン、カブでは発生を認めていない（平年並）。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.3	0.2
	寄生株率(%)	2.4	1.3
ダイコン	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.0
	寄生株率(%)	0.0	0.4
カブ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.0
	寄生株率(%)	0.0	0.0

- (2) 9月第3半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は亀岡で平年比やや少なく（-）、京丹後で平年比少ない（-）。

場所	本年	平年値
亀岡	1	8.8
京丹後	0	2.0

8月第4半句から9月第3半句までの合計誘殺虫数(頭)

(3) 9月第3半句現在、予察灯への誘殺数は京田辺、亀岡、京丹波ともに平年並。

場所	本年	平年値
京田辺	1	1.8
亀岡	3	2.5
京丹後	1	1.3

8月第4半句から9月第3半句までの合計誘殺虫数(頭)

(4) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (2) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

6 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 9月中旬現在、ダイコンでの発生は平年比やや多く(＋)、ナス、キャベツでは発生を認めていない(平年並)。

作物	項目	本年	平年値
ナス	幼虫数(頭/葉)	0.00	0.02
キャベツ	寄生株率(%)	0.0	2.3
ダイコン	寄生株率(%)	1.0	0.1

(2) 9月第3半句現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。

場所	本年	平年値
京田辺市	230.5	357.9
亀岡市	320.4	523.9
京丹後市	230.4	267.2

*誘殺数(頭)：8月第4半句～9月第3半句の合計値

(3) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少ない(＋)と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 齢が進むと薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、若齢期に防除する。

7 ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

(1) 9月第3半句現在、予察灯への誘殺は京田辺、亀岡、京丹波ともに平年並。

場所	本年	平年値
京田辺	2	0.9
亀岡	1	3.9
京丹後	0	4.7

8月第4半句から9月第3半句までの合計誘殺虫数(頭)

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
(2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

8 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年比少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は平年比少ない(－)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	30.4	78.5
被害度	7.6	22.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

9 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや少ない)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量はナスで平年比やや少なく(－)、カブでは発生を認めていない(平年並)。

作物	項目	本年	平年値
カブ	被害株率(%)	0.0	1.8
	被害度		
ナス	被害葉率(%)	6.0	26.8
	被害株率(%)	31.4	67.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または多く(－)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
(2) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。

10 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、発生量は平年比多い(＋)。

項目	本年	平年値
被害株率(%)	43.2	7.3
発生ほ場率(%)	100.0	27.0

(2) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。
- (2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (3) ネギの被害残さが発生源となるので注意する。
- (4) 本種は昨年6月以降、府内で発生を確認しているネギえそ条斑病を媒介する。
- (5) ネギえそ条斑病は、アイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus: IYSV) による病害で、本病の防除には ネギアザミウマに対する薬剤散布や防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的 である。詳細については、「防除所ニュース 平成26年第6号」(http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20140909_1.pdf) や5月25日発表の発生予察注意報第1号(ネギアザミウマ・ネギえそ条斑病)(<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tyuiho201505.pdf>) を参照のこと。

1.1 野菜類全般 タバコガ類 [オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量：平年比やや少ない

予報の根拠

- (1) 9月第3半旬現在、オオタバコガのフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺、京丹後で平年並、亀岡で平年比やや少ない(－)。

場所	本年	平年値
京田辺	0.0	1.7
亀岡	15.4	52.5
京丹後	0.0	1.6

8月第4半旬から9月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)

- (2) 9月第3半旬現在、タバコガのフェロモントラップへの誘殺数は京田辺、京丹後で平年比少なく(－)、亀岡で平年並。

場所	本年	平年値
京田辺	8.5	20.9
亀岡	20.9	28.9
京丹後	2.1	28.6

8月第4半旬から9月第3半旬までの合計誘殺虫数(頭)

- (3) 向こう1か月の気温は平年比低く(－)、降水量は日本海側で平年並または少なく(＋)、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生を放置すると被害が大きくなるので、早期防除に努める。
- (2) 幼虫が食入しているトマト、ナス、トウガラシ等の果実は処分する。

1.2 アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ [ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 9月中旬現在、ダイコンで発生を認めていない（平年比やや少ない）
(-)。

項目	本年	平年値
寄生株率(%)	0.0	2.7
発生ほ場率(%)	0.0	36.7

- (2) 向こう1か月の気温は平年比低く（-）、降水量は日本海側で平年並または多く（-）、太平洋側では平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 生育初期に加害されると大きな被害になるので注意する。
(2) ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に気をつける。
(3) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

※今後注意すべきその他の病害虫は p 10-11を参照

今後注意すべきその他の病害虫等

アズキ

1 炭そ病、さび病

9月中旬現在、発生量は炭そ病で平年比やや多く、さび病で平年比多い。発生を放置すると被害が大きくなるので、早期防除に努める。

2 子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

子実害虫類は、被害を確認してからでは手遅れとなることが多いので十分注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が茎や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。

3 オオタバコガ

近年、上記の子実害虫類に加え、オオタバコガの発生が多くなっており、葉だけでなく、子実を加害することが確認されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) オオタバコガの発生は、上記の子実害虫類と発生時期が異なる場合があるので、注意が必要である（葉も食害するので、開花期以外にも発生する）。
(2) B T 剤（サブリーナフロアブル、チューンアップ顆粒水和剤）を使用する。

チャ

1 チャトゲコナジラミ

平成27年9月中旬の巡回調査では、府内全域で発生を確認した。本種の農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ち着いた頃を見計らって薬剤散布を行う。

野菜

1 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

台風の暴風雨や冠水などにより、傷や泥のはね上げによって発病が助長される。発生すると大きな被害になるので予防防除に努める。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。
- (2) 暴風雨等で傷付いた場合は、早めに薬剤を散布する。

2 トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【施設栽培】

- (1) 黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。
- (2) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壤に埋める等、適正に処分する。

3 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプ J p L 等）、バイオタイプ B、バイオタイプ Q が確認されている。

バイオタイプ Q は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

参 考

I 近畿地方 1 か月予報

(9 月 1 8 日 から 1 0 月 1 7 日 までの天候見通し)

平成 2 7 年 9 月 1 7 日

大阪管区気象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう 1 か月の平均気温は、低い確率 6 0 % です。降水量は、近畿日本海側で平年並または少ない確率ともに 4 0 % です。

週別の気温は、1 週目は、低い確率 7 0 % です。2 週目は、低い確率 5 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	6 0	3 0	1 0
降 水 量 (日本海側)	4 0	4 0	2 0
降 水 量 (太平洋側)	3 0	4 0	3 0
日 照 時 間	3 0	4 0	3 0

病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「向こう 1 か月の気温は平年比低く、降水量は日本海側で平年並または少なく、太平洋側で平年並、日照時間は平年並と予想されている」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第 1 半 旬	第 2 半 旬	第 3 半 旬	第 4 半 旬	第 5 半 旬	第 6 半 旬
各月の	1 ~ 5	6 ~ 10	11 ~ 15	16 ~ 20	21 ~ 25	26 ~ 最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去 10 か年の平均とする。

データが 10 年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後 2 日以内
やや早い	平年値より 3 ~ 5 日早い
やや遅い	平年値より 3 ~ 5 日遅い
早い	平年値より 6 日以上早い
遅い	平年値より 6 日以上遅い

2) 量 (発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で 10 年間に 4 回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10 年間に 2 回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10 年間に 1 回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10 年間に 1 回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

「予報本文」の見方をチャノコカクモンハマキを例に示します。

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）
丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
(2) 4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数 (/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数 (/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率 (%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数 (/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数 (/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率 (%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- (3) 4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
(2) 通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
(3) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

IV 短期暴露評価の実施に伴う農薬の変更登録について

農薬の登録にあたっては、これまで、残留農薬の摂取量について、一日摂取許容量(ADI)を超えなければ食品安全上問題ないものと判断されてきましたが、今般、急性参照用量(ARfD)を超えないかという点についても評価されること(短期暴露評価)となりました。

今後、現在登録を受けている農薬について、順次、急性参照用量が設定されるとともに、短期暴露評価が実施されることとなります。

この結果、登録内容が変更される場合、変更登録が申請された段階で、農薬メーカーから変更登録の内容(商品名、変更事項等)が発表されます。これらの農薬は変更登録前であっても、変更後の使用方法に基づいて使用するようになります。

1 使用方法が変更された農薬

有効成分 (変更年月日)	主な商品名	変更内容※
アセフェート (平成26年11月17日)	オルトラン水和剤、オルトラン粒剤、オルトランDX粒剤、 ジェイエース水溶剤、ジェイエース粒剤、 スミフェート水溶剤、スミフェート粒剤、 ジェネレート水溶剤、ジェネレート粒剤	適用作物削除 適用時期変更 適用回数変更 希釈倍率変更
ジメエート (平成27年2月4日)	ジメエート乳剤、ジメエート粒剤 ベジホン乳剤	適用作物削除
フルバリネット (平成27年2月18日)	マブリック水和剤20、マブリックEW マブリックジェット	適用作物削除 使用時期変更
フェナリモル (平成27年2月18日)	ルビゲン水和剤、スペックス水和剤	適用作物削除
NAC (平成27年2月18日)	マイクロデナポン水和剤85 デナポン水和剤50	適用作物削除
カルボスルファン ベンフラカルブ (平成27年7月8日)	アドバンテージ粒剤、アドバンテージS粒剤、 ジャッジ箱粒剤、オンコルOK粒剤、オンコルスタークル粒剤、 オンコルマイクロカプセル、オンコル粒剤1、 ホームガーデン粒剤、オンコル粒剤5、 オンダイアエース粒剤、ガーデンホスピタル粒剤、 グランドオンコル粒剤、ガゼット粒剤	適用作物削除

(平成27年9月14日現在)

2 今後使用方法が変更される予定の農薬

有効成分 (変更予定年月日)	主な商品名	変更内容※
シハロリン (平成27年10月14日)	サイハロン水和剤、サイハロン乳剤、 ビリーブ水和剤	適用作物削除
メタフルミゾン	アクセルフロアブル	使用時期変更
ピリダベン	サンマイトフロアブル	適用作物削除

(平成27年9月14日現在)

※ 変更の詳細については下記の農林水産省、農薬工業会(要登録)などのサイトで確認することができます。また、上記の有効成分の農薬を使用されている方は使用方法をご確認の上、使用していただきますようお願いいたします。

農林水産省：<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農薬工業会：http://jcpa-seigen.jp/?page_id=5&reauth=1 (要登録)

詳しくは、京都府農林水産部食の安心・安全推進課のウェブサイト
(<http://www.pref.kyoto.jp/shokuanzenbosai/news/documents/tankibakurohyoka.html>) をご参照願います。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・ 京都乙訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山城北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山城南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中丹東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中丹西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

農作物病虫害情報サービス

- ・ ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成 9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－